

しをけば、雪霜に痛ますして、春になりてさかゆる物なり、されども實りは少し、略中同種子の分量の事、凡一段の畝むぎやすは四五升、稻麥は八九升、是先中分なり、田の溝のひろせばと、秋冬と地の肥瘠と、かれこれ指引して、思はく少薄く蒔て、こやしを多く用ひたるに、實り多しと、しるべし、又冬ぶかになるほど、少宛厚く蒔べし、種子おほひも早きは薄く、晚き程あつくおほふべし、尤種子おほひむらなく、塊をよくくだきて、細土ばかりにて、たねのよくかくる、様にすべし、蒔にも、種子おほひするにも、跡に心を留めて、だめをさ、されば、必多少むら有ものなり、少の手にて、蒔むらあれば、積りては過分の損あり、よく心を用ゆべし。

〔耕稼春秋〕五大麥小麥勸辨

一大麥は秋蒔て夏熟す、四時の氣を受、舊穀の盡る時分出來て、民の食を助けつぎ、新穀の出來るまでの助と成、されば稻に次て五穀の中にて貴き物也、故に聖人は是を重んじ、春秋にも、稻と麥との損毛を書せたまへり、實に近世靜謐にて、民多くなりぬ、麥作の勤疎ならば、食物乏かるべきに、都鄙是を作る事專成故、麥の多き事甚だ古に勝れり、されば今民の養の助となる事、是に續く物なし、實にめでたき穀物也、麥は總じて田ならばしつけなき堅田よし、弱く薄き地は、大麥によからず、惡し、其種に色々數多き物なり、若障り有て、末に蒔植るならば、必灰ごる馬糞などの能こゑを多く、蓄置肌糞を能致し、種おほひを厚しおけば、雪霜に痛ずして、春になりて榮ゆる物也、眞糞馬ごへ何れも灰ごへはよし、取分小麥に灰を以ておほはざれば、寒氣にいたむ物なり、五畿内東海道は麥作大分にして、宜鋪町人まで朝夕食とす、北國の麥と違ひ、地宜しく天氣能故か、麥の皮も薄く、春にはやく白むものなり。

一小麥地の拵、其外大麥に替る事なし、大麥よし少し遅く蒔所も有、同刈時も同じ、小麥は大麥田より遅蒔物也、小麥蒔地はさのみ肥たるを好まず、若すぐれて肥たる地に、肌糞を多く用ゆれ